福島県の東側には、約160kmの長い海岸線が見られ、その沖には、黒潮と親潮が出会う「潮目の海」があります。この文化展示のコーナーではその海に関連した縄文時代からの漁業の歴史、沿岸にすむ人々の生活の知恵や習わしを紹介しています。

(3) ふくしまの漁民信仰

「板子一枚、下は地獄」という言葉が示すように、海で働く漁師の仕事には危険が伴います。ゆえに船の安全と大漁を願う気持ちも強く、春先、海に御輿を担ぎ入れる「浜下り」、大漁と船の安全を祈願した絵馬の奉納、海の神である「アンバ様」などさまざまな信仰が見られます。若い漁師たちは、この「アンバ様」を休日の要求にも使いました。大漁が続き休みがとれない場合、夜、密かに若い漁師たちが井形に組んだ櫓の上に神社から運び出した祠を載せ、浜に簡易の「アンバ様」のお宮をつくりました。それが浜にまつられると次の日の漁が休みとされ、それを破って漁に出ると災難にあうとされていました。

また、神社ばかりではなく、船大工によって新船を進水させる前日、密かに船の中心部に守護神であるフナダマサマ（船霊様）を安置するという儀礼も行われ、現在の船にもこの習わしは受け継がれています。

▲フナダマサマ

▲浜下り

(5) 海の文化の伝播

漁師たちはかつては定住せず、海を広く移動しながら、進んだ漁法・技術を各地に伝えました。江戸時代初期、※紀州の漁師たちは漁を営みながら各地へと進出し、北は、黒潮に乗って※房州へ、さらに東北各地へと移住しました。紀州や房州で育まれた漁法・技術は、いわき地方へも伝わり、カツオの一本釣漁、イワシの地引き網漁、捕鯨、そして製塩の方法等とともにさまざまな文化も伝わりました。現在でも福島県浜通り地方の沿岸には、千葉県や宮城県の大きな港町に親戚縁者を持つ家があり、海を通した人の移入移出があったことを示しています。また、大漁祝いの晴れ着である「万祝」を船主から乗組員に贈る習わしは、千葉県の銚子市周辺から発生し、江戸時代末期からイワシの地引き網漁とともに静岡県から青森県八戸地方までの福島県を含む太平洋沿岸に広がり、昭和20年頃までその習わしがありました。

▲万祝（マイワイ）

※ 紀州＝三重県、和歌山県の紀伊半島周辺
※ 房州＝千葉県

(4) 水産物利用の知恵

人は海からの恵みを食料としてさまざまな形で利用してきました。海水から塩を製造することもその1つで、縄文時代には土器を使って海水を煮つめる土器製塩という方法で塩を作っていました。江戸時代初期、相馬地方では入浜式の技法が、いわき・双葉地方では、揚浜式による製塩が行われ、塩の専売制度がしかれる明治38年まで、各地でその土地にあった製塩が行われていました。

また、福島県においては、黒潮に乗って回遊するカツオを利用し、数多くの工程・期間を費やして製造する鰹節、雑魚を利用し、蒲鉾やちくわなどに加工する練製品が明治時代頃より有名で、現在においても板付きの蒲鉾の出荷額は日本有数になっています。

▲鰹節製造（大正時代）